

日弁連コスタリカ報告

(はじめに コスタリカの概要)

今年秋、釧路で日弁連人権大会があり、小生はその第1分科会シンポジウム

(テーマは自然再生や野生生物保護)の実行委員になっております。

そこで、シンポジウムの準備として、

コスタリカは小国ながら先進的な環境立法などで知られるため、

シンポ実行委では3月18~27日にかけて、この国に行って環境エネルギー省、現地研究施設、各保護区等を視察してきました。

ここで、コスタリカという国について簡単に説明します。

場所は中央アメリカ、パナマの西隣にあり、面積 51095 k²、人口約 400 万人と、人口面積とも北海道の3分の2ほどの大きさです。

人口・経済は首都サンホセ近辺に集中しており、半径 25 キロ以内に国の人口の約半分が住んでいます。

北緯 8~11 度に位置し、地理的には熱帯に属していますが、気候は変化に富み、例えば首都サンホセは標高 1150mにあることから、年間平均気温が 22.5 度と余り暑くなく常春の快適な気候です。

また、第二次大戦直後の悲惨な内戦の後、常備軍を廃止して中米の和平を主導したこと、独裁者を防ぐための大統領・国会議員の連続再選禁止といったユニークな民主主義でも知られています。

(3月19日 ラ・セルバ)

(18日は移動のみなので省略)

ラ・セルバはサンホセの北約 100 km、大西洋側の低地熱帯林にある自然保護区で、1900 種の植物、500 種の蝶、420 種の鳥、49 種の両生類など多様な生物が生息しています。

ここはサンホセから車で二時間程度ですが、標高が全然違うため、「暖かい」から一気に「蒸し暑い」気候に様変わりし、コスタリカの自然の多様性を感じた一日でした。

この中には熱帯研究機構 (OTS) が運営するラセルバ生物ステーションがあります。

OTS は米国及びコスタリカの 50 以上の大学の参加する非営利団体で、収入は国内外の各種財団から賄われています。

ここで学術機関とジャングル、というと一見ミスマッチにも思えますが、

熱帯雨林は地球上における生物多様性の宝庫であり、気候変動の影響を最も受けやすい地域でもあります。

それだけに、生物や気候変動に関する大変充実した研究が行われており、

研究成果は地元の人から私達のような海外の調査団まで、幅広い範囲に公表されています。

ただ、これほどの学術機関が道路建設に意見を出しているのですから、地元の政府も、もう少し耳を傾けた上で政策を決定するべきだと思うのですが^^ゞ

(3月20日午前 INBIO)

INBio とは Instituto Nacional de Biodiversidad (= 生物多様性研究所) の略で、
コスタリカの生物多様性の保全と賢明な利用の実現を目的に、
政府、大学、国際機関、企業、NGO 等の協力の下に 1989 年に設立された非営利集団です。

ここでの先駆的な試みとしては、昆虫類と維管束植物を中心とした調査活動が挙げられます。
私達も研究室を見学させて頂いたのですが、何千という昆虫標本の一つ一つにカードを付け、
それに加えてデータを一つ一つパソコンに入力していく息の長い作業を見るにつれ、
「私達はまずこの国のことをよく知らなければならない」という言葉の重みを感じました。

もう一つの先駆的な試みは、製薬会社などと共同で実施した生物多様性の「化学的探査」活動で、
これは、一部の生理活性化合物を研究所で抽出した後、製薬会社などでさらに詳細な研究開発を行い、新薬の
開発を実現しようとする事業です。

私達も生物由来物質から作られたユニークな香水を嗅ぐ機会に恵まれましたが、
「金の卵を産むガチョウを殺してはならない」というイソップの警告は今でも新鮮な響きを放っています。

(20 日午後 環境エネルギー省)

環境エネルギー省(以下「MINAE」)では環境副大臣(国会議員ではありませんが、政治任用スタッフのよ
うなので、「事務次官」というよりも日本で言う「副大臣」に近いと思います)とスタッフ 3 名に出迎えて頂
いて、コスタリカの環境法制度に関するお話を伺う予定でした。

ただ、ここで一つハプニングが。

すなわち、質問内容の中には事前調査を要するものも少なくないことから、日弁連では事前に質問事項を作成
した上で MINAE に送ったのですが、MINAE は何かの手違いで、日弁連の質問事項をスタッフ止まりに
して、副大臣までは回さなかったようです。

この話を聞いた時点では「副大臣に行っていないのでは、政治的な話は余り聞けないだろうけど、具体的な事
実関係はスタッフで抑えているだろうから調査に支障はきたさないだろう」と思っていたのですが...

実は MINAE を実質的に掌握しているのはこの切れ者副大臣で、スタッフは本当に単なる事務役に過ぎませ
んでした。

MINAE 調査の実が十分挙げられなくて少し残念ではありましたが、日本とコスタリカの官庁機構の違いが
少しだけ分かった一日でした(^.^)

(21 日 グアナカステ 1)

グアナカステはコスタリカの北西部にある国立公園です。

ここも海岸に近く標高が近いだけに気温はラセルバ同様かなり高かったのですが、
ラセルバがカリブ海沿岸、つまり東海岸にあって湿気の多い蒸し暑い気候なのに対し、
こちらは太平洋側、つまり西海岸にあり、からっとした気候になっています。

一般的に大陸の西側は乾燥気候、東側は湿潤気候だとは言われていますが、
山を挟んでわずか 100 キロちょっとでここまで気候が違うのはちょっとした驚きです。

このグアナカステ国立公園は、1580 平方キロメートルの面積があります。

ここは全て国有地で、なぜこれほど広大な土地を買収できたかということ、もちろん 8200 団体から 5200 万ドルもの多額の資金が集まった、というのもあるのですが、ここはニカラグアの国境に近いというのも影響しているようです。

つまり、かつてニカラグアでは内戦による政情不安が見られ、従ってなかなか企業の進出が進まず、国立公園にするしか使い道がなかったとのこと。

ニカラグアの人々はこの時期（あるいは今も）とても大変な思いをいただろうと思いますが、どんな物事にも複数の側面があるのかもしれないね。

（ 2 2 日 グアナカステ 2 ）

前日のレクチャーに続き、この日はグアナカステ国立公園の現地を案内して頂きました。

この日私達を案内してくれたのは生物学者（女性）で、当然ながら現地の植生について色々教えて下さったのですが、

加えて曰く「政府（と一部の「NGO」）が政府のお金を盗んでいます」

つまり、各種団体・個人からの資金は一旦財団に集められ、使い道はNGOも参加する委員会で決められるのですが、

委員会の 5 名中 3 名は環境省のご指名であり、従って政府のお役人の意向に沿って用途を決定し、現場の研究者の意向とは微妙に違ってくるようです。

また、前日には国立公園、生物保護地域、といった保全制度の区分についてもレクチャーを頂いたのですが、こうした区分についても「生態系とは何の関係もない」と一刀両断。そうとうお役人に対して腹を据えかねているようです。

ま、コスタリカも日本と同様、人間が構成する地上の国。

学ぶべきはできる限り学ぶべきですが、現地の人々の具体的な苦悩もしっかり心に留めるべきでしょう(^^ ;

（ 2 3 日 カーニョネグロ ）

ニカラグア国境にほど近いカーニョ・ネグロ自然保護区（の近く）を訪問。ちなみにカーニョとはスペイン語で「水路」、ネグロとは「黒」という意味で、ここを流れている川はむしろ茶色なのですが、もっと上流に行くと木が腐って水が黒くなっているようです。

ここは野生生物の宝庫で、グリーンバシリスク、ナマケモノ、ホエザルのような珍しい動植物が多数生息しています。ただ、小生は視力はいいはずですが、動態視力がなっていないだけに、いろんな生き物を見つけるのは一行で一番最後になってしまいました(^^ゞ

また、少し川を下るとそこはニカラグア国境。しかし、国境には簡単な鉄条網があるだけで、カップルで来られた先生方は少しだけ国境線を越えて「国境を越えた愛」の記念撮影をしていました。きっと宇宙から地球を見たら、人間が引いた国境線など見つけれないことでしょう(^^)

夕刻、モンテベルデに到着。

（ 2 4 日 モンテベルデ ）

ここモンテベルデ自然保護区は国土の北西部に広がる熱帯雲霧林地帯に位置します。

熱帯雲霧林とは、熱帯の標高 800 ~ 1300 メートルの地域にあって、常に雲で覆われているので湿度が非常に高い密林の事を指します。

標高が高いので、高温多湿の「熱帯雨林」とは気候・植生を異にします。

この自然保護区は国から一定の管理を受けているものの、国立公園ではなく民間のナショナルトラストである熱帯科学研究所が管理する自然保護区です。

この保護区の収入は、8割が観光収入（入場料収入）で、「事業」としてはある程度の成功を見せています。

ただ、「保護」という観点から見るとあまり観光客がたくさん来すぎると、

今度は観光客の過度の利用（オーバーユース）による環境破壊という問題が生じます。

そのためこの保護区も観光収入からの脱却が課題となっており、特に地元の観光業界をどう説得するかが問題となっています。

ただ地元自治体まで観光優先になっていないのが救いで、自治体の理解をどのように得たのを知りたいところですが、

いかんせん言葉の壁もあり、十分な質問ができなかったのが惜しまれます(^^ ;

（25、26日 ダラスにて）

25日はいよいよコスタリカとお別れ。25日の午後空港を出て、その日の夜はアメリカ・テキサスのダラスで一泊し、26日の午前にダラスを出て、日付変更線を越えて27日夕方に日本に帰ってきました。

ところが、ダラスでは最後の最後までトラブルに見舞われました。

その1 25日夜

確か、ダラスで泊まるホテルの代金は旅行代金に含まれているはずですが、ホテルの担当者は「払われておりません」。ここでトラブルになるのも嫌なので仕方なく代金を払いました（但し、私以外は全員カード利用なので、実際に現金で代金を払ったのは小生のみ）。

もっとも、帰国後事実関係を確認したらやはり旅行代金に含まれているとのことで、結局お金は戻ってきましたが...

その2

飛行機がなかなか出発せず、搭乗ゲートが何度も変わっているの一体どうしたのかと思ったら「燃料が漏れています」

ということで出発時刻が二時間ほど遅れ、福井在住の小生は頻繁に特急が出ているので何とか27日中に帰れましたが、関空から更に飛行機で乗り継ぐ先生方は途中宿泊を余儀なくされました。

ま、それはさておき、旅行の準備に当たられた方々、本当にありがとうございました！